

終戦前後の回想

滋賀県 高田 義信

昭和十四年春一月十日、雪が舞う北陸路敦賀歩兵十
九連隊に現役兵として入隊しました。その後、数々の
苦を経て、桜花咲く四月連兵場で一期の検閲を受けて
一等兵に進級しました。昨日まではだれを見ても敬礼
ばかりしていた私も少々肩に重みを感じるようになり
ました。昭和十五年七月、北支那太原駐在の独立混成
九旅団司令部付となり、八月当地に到着しました。見
るもの聞くもの皆珍しく戸惑いばかりしていました。
何とか少々なれたころ大東亜戦争となり、中支那武昌
に転属となり、長沙作戦の後方勤務を行いました。翌
年三月、北支那天津に移り参謀部付の仕事をしていま
した。昭和十八年十二月十日召集解除となり、しばらく
家庭の味わいを受けました。

昭和十九年七月七日敦賀三十六部隊に召集、同月独

立混成六十九旅団に転属す。部隊は南千島色丹島を経
て国後島に移駐しました。二十年三月八十九師団に転
出となり、北海道帯広で部隊編成、五月十七日南千島
択捉島天寧着、天寧西側地区の基地整備と南千島全般
の通信網業務を行いました。今まで千島は日本領土と
確信していましたが、終戦八月十五日以降、何やらお
かしげになってきました。八月二十三日ころソ連兵が
進駐して武装解除されました。

進駐してきたソ連兵は、幼稚と申しますか通信器材
の使用法をなんば教えてもわからない。また、高野豆
腐を火薬と間違え火をつける等々でした。その後しば
らく天寧兵舎で日を送っていましたが、九月上旬、日
本の兵隊は内地日本へ帰すから全員天寧飛行場に集合
せよとのことでした。皆、さあ帰れる、国では食糧、
衣類、日用品など不足していると聞くので、あれこれ
品物をしっかり縛って荷物として飛行場に集合する。
しかしソ連の通達は、

一、兵、下士官は小包一個

一、将校は行李こおり一個

もし、これに従わない者は当地に残して塹壕掘りをさせる、との強い厳命でした。残念ながらあきらめるほかない。今しばしの辛抱だ、帰れば何とかなるさと思ふよりほかに仕方がなかった。

さて、ソ連船に乗る。私物をあれこれ取られる苦情が出る。また、船の前後には護衛艇が目を光らして威嚇していました。今までに捕虜となつた経験のない我々には、甘い言葉をうのみにして、明日は稚内港に着くと信じていて、船の中の食事ニシン二匹、黒パン一片もよき土産話になると雑談をし、雲間隠れに見える北海道を眺めていたものです。

その後、船は進路を北に変え樺太大泊に着く。明くれば一路南へと進むので、皆やれやれ稚内に行くと思ひしや一転西北方へと進む。話が違ふと何度談判しても言を左右にしてらちが明かない。そのうちに船はソ連領ソフガワニの港にいかりをおろす。港湾のかなたには日本の兵と思われる人影を見て、やられた、だまされたと思うが後の祭り。かれこれしていると、輸送船の副官から「下船せよ」との声がかかり、船から降

りました。ソ連兵大尉が、ただいまより命令す、皆に伝えるやうとのことでした。

一、今日より五十七日間ソ連において仕事に従事し、その後日本に帰す

一、部隊編成など考えず一斉に下船せよ

乗船して皆と相談するも致し方なしとのことで、一斉に下船する。降りると、有蓋列車が待つていて積み込まれる。中は満員、出入り口は、ただ食料品受領、用便を兼ねたすき間があるのみでした。車は一路シベリアの荒野を走り、九月二十日ムリー地区第八收容所前で下車する。人員約五百人でした。仕事は鉄道新設工事でした。ただ、ありがたく思ったのは、当所長スミス氏は大変日本人を理解してくれたことです。一例を挙げれば、

一、ノルマが不足しても話し合いで百分とす

一、雨降りの仕事は中止

その後、私は道案内人とともに鉄道線路を歩いて三時間、第二十一收容所に転出しました。この部隊は満州よりの寄り合い部隊で約千人いました。私はこの

まとめ役となりました。仕事は伐採、鉄道新設工事でした。そのうち一番苦しかったことは、冬、手足が凍りつく寒い夜、汽笛が鳴れば速やかに起きて、動いている汽車に飛び乗り砂利を線路の両側にまく、動き終われば動いている汽車より飛び降りて帰る。何とか暖まればまた汽笛が鳴る。身も心もくたくたでした。しかしノルマは汽車から砂利を下ろす時間のみで、往復の時間は含まれていませんでした。ああ殺生など幾らかけ合ってもナシのつぶてでした。再度話し合いをした結果、改善されましたが、私はその責任をとって他の収容所に転出させられました。

その後転々として回され、あげくの果ては反動分子として他の人とともにムリー地区将校収容所に入れられました。人員は五百人くらい、尉官ばかりの収容所で、私はその責任者の一人でした。仕事はなく、ただ健康管理に精を出していました。その後コムソモリスクの収容所に入所しました。人員は約千人くらいでした。毎日の仕事としてはありませんでした。

二十二年十月、全員汽車に乗りナホトカ着、一、二、

三収容所を経て乗船、公海に出たらばソ連兵は下船、日本の船員の顔が見えたときのうれしさ、「皆様大変ご苦労さまでした。今、皆様の家庭へ電報を打っています。」と安心して下さい。船は函館港へ向かっています」とのことでした。

シベリア抑留記

大阪府 吉岡 芳延

私は、大正六年十一月六日に鳥根県松江市下佐陀町にて出生、四歳の頃、鳥取県米子市愛宕町七五番地に移転し、鳥取県立米子中学校三年修了にて大阪鉄道局米子機関区に勤務し、昭和十二年九月中国山西省陽泉機関区に派遣され、十四年春に帰国復帰しましたが、同年九月南滿州鉄道(株)に入社、機関士として勤務中、興寧線(東寧―図們間)にマレー半島より牡丹江に出張検閲に來られた山下奉文中将を蒼林の駅にて迎え、輸送したのは忘れられない記憶の中にあります。